

平成27年度松江工業高等専門学校外部評価委員会

- 1 日 時 平成28年3月3日(木) 13時30分～15時30分
- 2 場 所 松江工業高等専門学校 会議室
- 3 出席者

【外部評価委員】

高等教育機関関係

- 秋重 幸邦 氏 国立大学法人 島根大学 理事(企画・学術研究担当副学長)
大庭 卓也 氏 国立大学法人 島根大学研究機構産学連携センター長

地方自治体関係

- 楫野 弘和 氏 公益財団法人 しまね産業振興財団 副理事長

本校関係者

- 糸原 保 氏 松江高専同窓会 副会長

【本校出席者】

- 1) 井上 明 校長
 - 2) 原 元司 副校長(教務主事)
 - 3) 浅田 純作 副校長(管理運営担当)
 - 4) 高見 昭康 校長補佐(学生主事)
 - 5) 山根 繁樹 校長補佐(寮務主事)
 - 6) 田邊 喜一 校長補佐(専攻科長)
 - 7) 箕田 充志 校長補佐(研究担当)
 - 8) 松本 浩介 教授
 - 9) 岩澤 芳和 事務部長
 - 10) 嘉本 龍二 総務課長
 - 11) 坂本 英治 学生課長
- 4 欠席者

【外部評価委員】

地域教育関係

- 山根 貴史 氏 島根県中学校長会長 松江市立第一中学校長

産 業 界

今岡 克己 氏 一般社団法人 松江テクノフォーラム理事
株式会社ワコムアイティ 取締役会長

【本校】

なし

5 日 程

開 会

1. 校長あいさつ 13 : 30
2. 委員長及び委員紹介 13 : 35
3. 本校出席者紹介 13 : 40
4. 「本校の教育・研究活動～地方創生を意識して～」の状況報告
. 13 : 45 - 14 : 30
- (1) 概 要 発表者 浅田副校長
- (2) 教育活動
教育関係 発表者 原 教務主事
学生支援関係 発表者 高見学生主事
山根寮務主事
- (3) 研究活動 発表者 箕田校長補佐
5. 質疑応答 14 : 30 - 15 : 15
6. 委員による講評 15 : 15 - 15 : 30
7. 校長謝辞 15 : 30

閉 会

6 議 事

開 会

開会に先立ち、岩澤事務部長から配付資料について説明があり、次いで、開会に当たり、井上校長から挨拶があった。

○井上校長

松江高専の校長の井上でございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。3月に入りまして、皆様それぞれのお立場で誠にお忙しい中、松江高専までおいでいただき、この外部評価委員会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

今回から、島根大学理事の秋重先生、しまね産業振興財団の楫野副理事長、同窓会の糸原副会長に、それぞれ新たに委員をお願い申し上げ、ご快諾をいただきまして、誠にありがとうございます。また、このほかの皆様におかれましても、引き続き委員の就任をお願いいたしまして、どうぞよろしくお願いいたします。それから、いずれの委員の皆様方におかれましても、すべて松江高専と深く関わりのある方でありまして、日頃からお世話になっております。この場をお借りいたしまして改めて御礼を申し上げます。

この外部評価委員会におきましては、毎回テーマを設定しまして、その内容に焦点を当てながら高専の活動全体についてご説明を申し上げるとともに、意見交換をお願いいたしまして、ご講評をお願いするということとしております。

今回は地方創生ということを意識したテーマとしております。このことにつきましては、地域社会と深く関わりを持ちます高専といたしましては、当然重要な観点であります。それから、今まさに国全体の動きといたしまして、その推進のため、色々な方策が期待される状況であります。本日ご出席の皆様方はその関係者の方々でもありますので、改めて申すまでもないこととなりますが、島根県におきましては、地方創生という言葉が強調される以前から、各種の取り組みが行われております。高専としてもその関わりの中で存在しておりますが、今般、国全体の大きな動きの中で、改めて意識していかなければならないと思っております。

今年度、地方創生に関しましては、各地方自治体それぞれが総合戦略を作成しておりますけれども、島根県の総合戦略を見ますと、県内の大学・高専に関わることといたしましては、県内企業への学生のインターンシップ参加、このための色々な連携、それから、出身学生の県内への回帰・定着を図るための施策を検討するということについても記述がな

されているところであります。そういう中で、今年度、全国の大学・高専を対象といたしまして、国の事業として、地（知）の拠点大学による地方創生推進事業が公募されました。これを略してCOCプラスと申しております。COCとは、センターオブコミュニティの略であり、そのプラスというものであります。これが募集されまして、昨年9月末に採択が決定されております。その中の1つといたしまして、島根大学を中心として、オール島根の趣旨で採択されたものがありまして、その中に松江高専も参加しているところであります。現在、その資金を活用した事業の関連施策が始まったところであります。また、今年度は島根県の商工労働部から松江高専が委託を受けまして、大都市圏に在住しております松江高専の卒業生が集まるイベントを開催いたしました。これにつきましては、同窓会、（一社）松江テクノフォーラムの協力の下で、東京、大阪、広島で、都合4回にわたりまして実施をいたしました。その場で卒業生相互、あるいは県内企業と卒業生が交流することにより、県内産業の動向にも関心を持ってもらう機会としたところであります。

今日はこのような動きとともに、高専の教育や研究の現状をご説明申し上げまして、どうぞ忌憚のないご意見を伺いたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。

議 事

○委員長の選出

岩澤事務部長から、「委員長の選出については、本委員会規則により委員の互選により選出するということになっているが、島根大学理事・副学長の秋重先生にお願いをしたいがよろしいか。」との提案があり委員の了解を得た。

○秋重委員長

初めての経験で、きちんとできるかどうか分かりませんが、やらせていただきます。

私は島根大学で企画と研究学術を担当している理事でございます。先ほど校長先生のほうからもご挨拶がありましたように、島根大学と松江高専は包括的な連携協定を結びまして、ともに島根県のためにがんばっていこうということをやっております。特に昨年の12月12日には、COCプラスの事業で、くにびきメッセで大交流会を行いました。200近いブースが集まりまして、溝口県知事も来られまして、また、文科省からは大学改革推進室長の猪俣室長が来られて、「島根県での取り組みというのはなかなか先進的で、9月にスタートして、すぐさま大きな取り組みをした」ということで、かなり評価をいただいたとこ

ろでございます。これからも一緒にやっていくという関係でよろしく願いいたします。

引き続き、委員の自己紹介、学校出席者の紹介があった。

続いて、「本校の教育・研究活動～地方創生を意識して～」の状況報告が、資料に基づき、下記の発表者から説明された。

概 要	浅田副校長（管理運営担当）から説明
教育活動	
教育関係	原 副校長（教務主事）から説明
学生支援関係	高見校長補佐（学生主事）から説明
	山根校長補佐（寮務主事）から説明
研究活動	箕田校長補佐（研究担当）から説明

松江高専の説明後、意見交換及び質疑応答があった。

○秋重委員長

それでは、質疑応答をお願いいたします。どなたからでも結構ですので、質問等ありましたら、出していただければと思います。

はい、大庭先生お願いします。

○大庭委員

どこだったか忘れてしまいましたが、アントレプレナーシップの教育というのをしておられるようなお話だったと思うのですが、具体的にどういう取り組みをされているのか、参考までにお聞かせいただければと思いました。

○箕田校長補佐

本校におきましては、キャンパスベンチャーグランプリ中国というものに第3回から応募しておりますので、十数年連続で学生にテーマを考えて提出させます。それは、どういったビジネスモデルを作れば良いかというようなコンテストがありまして、学生はものを作って、その利益をどうやって出すかというようなことを踏まえてレポートを書きます。それを応募書類で出すという形で、色々な地域独特の商売といいますか、そういったことを考えながらやっています。例えば、石見銀山でタクシーを使ったビジネスモデルや、昨

年は「お土産カタログ」といって、松江市で旅行客がお土産を見て、あとから発注できるようなインターネットを用いたシステムを提案して、最優秀賞をいただいたりというような形で、第3回から11年連続で入賞しております。先ほど紹介がありましたけれども、毎年十数件の応募をしております、中国地方の高専の中では群を抜いて1位ということで、そういう社会を見据えた教育を実験実習に取り入れています。

○大庭委員

キャンパスベンチャーグランプリというイベントを利用してということですが、学生にどのような形で応募させるのですか。何人かに「出しなさい」というような形ですか。

○箕田校長補佐

専攻科のシステム実験で行っておりますので、専攻科生全員が3、4名で1つのグループを作りまして、全員が提出という形になっております。

○秋重委員長

よろしいですか。就職のことなのですが、COCプラスで地元定着率10%増ということなので、ここでいうと、今、3割が地元で就職されて、それを4割まで持っていくということですが、就職も30倍という求人が来るぐらいになってくると、大都市にある大手などにどんどん入っていけるような状況ができあがってきているような気がするのですけれども、そんな中で地元はどうやって定着させていくかというのは、いくつか方策みたいなものは出されてはいたけれども、地元の企業を紹介していくとか、色々あると思いますけれども、その辺りについて、もう少し何か対策的なところを教えていただけませんか。

○箕田校長補佐

先ほど申しました3割という地元就職率は、全国の高専でもかなり高い方で、他の高専は、9%の地元就職でした。本校も以前から地域に根ざした教育ということで、数年前までは地元就職が20%台でしたが、そこから30%まで伸びていきました。それをさらにCOCプラスで伸ばすということなので、なかなか大変かと思うのですが、現在、島根県あるいは松江市でも誘致企業をかなり持ってきていただいております、そこに人材を供給するのが本校の役割であると思っております、今年度も大阪に本社がある企業に数名、松江の支

店ができるということで、各学科 2、3 人ずつ入った例もありますので、そういった形で、学生に地元企業はどういったものがあるかということが一つ。そしてもう一つ。給与面からいきますと大企業には負けるかもしれませんが、住みやすさでいいますと、松江市は全国で 1 位の統計を得ました。島根県内の市町村がトップ 10 の中にいくつか入っているということで、働き方と暮らし方を踏まえて考えると、島根県は大都市の企業に比べて劣らないのではないかとというようなことも学生に伝えながら、就職活動に向けて情報提供しようかなと考えております。

○秋重委員長

大学も同じような課題を抱えておまして、どうしたら良いかとお互いに分からないところかもしれませんが、今言われた暮らし方を踏まえて、「親御さんがいて、子育てもしやすいよ」ということをどうやって宣伝していくかという、学生の意識をどう変えていくかということなのでしょうけれども、大事かなと思います。

○井上校長

外部の方から学生に話をさせていただく機会があるのですけれども、その中で、例えば通勤時間や暮らしやすさをお金に換算すると、どれぐらいの価値があるのかということを取り上げていただくことがあります。また、学生自体が地元の産業、地元の会社にはどういったものがあるって、実はこういう事業展開をしているのだということを意外に、あるいは当然にはどうか、知らないということがあります。そういった情報を色々な形で提供して、学生に考えるきっかけにしてもらいたいと考えています。

○大庭委員

今のお話に関連してですが、地元を知らないというのは、大学で話をしても、島根県の出身者が島根県のことを知らないという、それと同じように感じるのですけれども、そのために何か地元を知るための授業など、そういう工夫はしておられるのですか。

○井上校長

例えば、先ほど紹介がありましたけれども、地域社会と産業という授業を従来から行って、色々な関係者、地域の産業関係を良くご存知の関係者の方から県下の状況の紹介

をしてもらうということもありますし、COC プラスに関連して、「ふるさと教育」、島根大学でも島根学というものをやっていたりしますが、そういうような形で学生に情報をきちんと提供しながら、地域のことを考えるというようなことをしています。

○浅田副校長

あとは授業の中で、島根に関わることを随所に入れていきます。

○井上校長

また、地域の産業に直接触れる機会として、例えば金属産業の工場にバスで行って見学をするなどを通じて意識を植え付けることを行っています。

○箕田校長補佐

付け加えますと、アクティブラーニングや PBL の教育で、例えば島根のまちづくりをするというような課題を出しまして、そのテーマに関して学生が自分で調査をして発表したり、地域の課題を解決するようなテーマを出しまして、学生がグループでディスカッションして、その成果を発表するというような取り組みも行っておりまして、できるだけ地域に目が向きやすいような環境を作っております。

また、会社を知らないということは、やはり企業対企業の取り引きが多いわけで、学生が知っているのはコマースをやっているような会社が多いということで、少しそこらへんが学生が企業をあまり知らないのですが、先ほどのスサノオの話でもありましたけれども、航空産業とかに特化したような授業などを行っているということで、かなり学生の興味を引いているのではないかと考えております。

○原副校長

地域インターンシップがかなり影響が大きくて、そこで実際に企業を見てというところで就職を決める学生もいるので、そういうところをもう少し拡充していく方法があるかなと思います。

○井上校長

いろいろあるのですが、例えば卒業研究。これは 5 年生が行い、専攻科ではその研究を

深めますが、その中で地域に関連したことを取り上げることがあります。これは取り組みのしやすさという点もあるかと思いますが、その中で、地域課題について考えさせるような、そういうような形で地元への意識を高めていくということもあります。

○楫野委員

今年の就職で、県内の率はいくらでしたか。

○井上校長

大体3割ぐらいです。

○楫野委員

それは健闘したほうですよ。かなり引きが強かったということですね。今年は県外から。

○井上校長

そうですね。

○楫野委員

逆にがんばられたという感じですね。私、今年は落ちると思っていました。今年は県外からものすごい引きが強くて、高校生は県外に取られています。県内企業はみんなひいひい言っていました。去年は4、5人増えたところも、今年は0だと言っておられました。

○浅田副校長

先ほども出た企業説明会なども、昨年度は（一社）松江テクノフォーラムの会員企業以外もやっていたのですが、今年度は（一社）松江テクノフォーラムの会員企業さんに限定した形で行っていたので。

○楫野委員

そうですね。少し（一社）松江テクノフォーラムを宣伝しないといけないですね。

○井上校長

この企業説明会も授業の一環で実施しておりますので、進学希望の学生も含めて多くの者が参加するというような内容です。

○楫野委員

進学された方も卒業するときにそこを意識されるというところもありますから、先手を打っておくというのも大事なことですし、私が嬉しかったのは、卒業生の交流で、半分近くが「将来、島根県に帰っても良い」と思っておられる。このような、しっかり意識をもっておいていただきたいというところですよ。

うちは今年度から、プロフェッショナル人材というマッチングの制度をやることになりました。県内の企業が、いわゆる高度な能力を持った人材を獲得するという事業をやらなければいけない。これから 2、3 年やらなければいけないのですけれども、その中でも技術系の人材ということでは、卒業して、県外のかかなり高いレベルの会社で、それなりに重要な地位の方をもう 1 回連れ戻すということも、その中で取り組めるような気がして、本当にこういうのは良いなと思っています。ずっとこれは課題でした。卒業生がどういうところでどういうことをやっておられて、できれば U・I ターンに結び付けたいというのは、思いとしてはあったのですけれども、今年、そういう形で実現したので、私も非常に嬉しいなと思っていますし、私どももご協力できることはいくらでもしたいなと思っています。

○井上校長

卒業生交流フェスタには糸原さんもお越し願ったのですけれども、県の委託事業ですので、県の本庁の担当者、それから東京事務所、大阪事務所の方が見えて、ふるさと島根定住財団からも来ていただいて、説明をし、資料を配り、アピールして頂いている状況です。

○楫野委員

東京事務所と大阪事務所では、独自に学生ネットワークを作ったりしています。出身の大学生を集めて、そういうようなこともやっていました。色々な取り組みをして、1 人でもという形で。

島根大学もそうですけれども、10%上げるというのは相当至難なことだと思いますし、

県立大学松江キャンパスが4大化になり、平成34年から卒業生が出てくるということで、そうなるそこからも4大卒が出てくるということで、それだけの人材を県内企業は逆に吸収できるのかという問題も実はあります。高専さんは学生さえその考え方が切り替わればできると思っています。引く手あまたですから、高専さんは正直言って。なかなか採りたくても採れないという企業ばかりですから、そこはできると思います。問題はやはり学生の気持ちですよ。そうすると、それをどうするかというのは色々なやり方がありますけれども、インターンシップをもう少し、しかも短期ではなく、企業に求めていく必要があると思います。私どももそれを企業に言いたいと思っています。「来ない来ない」と言うのではなくて、「本当に欲しければ努力してください。そのぐらいしないと来られませんよ」と。同じ人材を県外の大企業と争うわけですから。「放っておけば棒に振りますよ」という話なので。そここのところの努力をしていかなければいけないかなど、企業さんにはお願いしたいと思っています。

○井上校長

地域の企業のインターンシップにつきましては、実のところ、例年受け入れていただいている企業に受け入れの条件についてお話を伺いながら行うのが中心になっています。学生としては、夏休みに単位が取れるという側面もあると思います。

実態からいうと、やはり短い期間が大部分という状況です。ただ、内容的には色々な形がありますので、どこまで理解が深まるかということは、工夫をしながら行っていく必要があるのかもしれないと思います。

○楫野委員

ある企業は1ヵ月ぐらい入れて、大概はどうも入られるみたいですね、その方が。こちらでも選んで送られているのだらうと思いますけれども。そういう実例も出しながら、少し企業さんの努力も。私も公務員生活をやっていたときに1週間くらい受け入れることもあったのですよ。

○秋重委員長

女性も結構いらっしゃいますね。5分の1ぐらいが女性ですか。

○井上校長

そうですね。

○秋重委員長

女性の方の就職というのは、これは何か特別なことを考えられているのですか。それともまったく男子と同じようなやり方でやって、同じようなところに入っていられるということがあるのですか。

○浅田副校長

最近はほとんど同じです。以前は女性の就職は難しかったのですけれども、最近は「女性の方を採りたい」という企業の方も多くなってきています。

○秋重委員長

それは地元の企業の、例えば女性は「地元で残りたい」という希望が多いとかいうことはないのですか。

○浅田副校長

女性の方が多いかもしれないです。

○秋重委員長

そういう人は「地元でこういうのがありますよ」ということをもっともっと紹介していけば、女性は比較的留まりやすいということはあるのですか。

○浅田副校長

どうでしょう。

○秋重委員長

男女共同参画の世界をつくっていかなければいけないということですよ。ですから、企業の方も女性が活躍できるような、そういう処遇をしていかないといけないと思います。そういう時代になっていますので、女性がたくさんここに入ってきて、それが地元に残っ

ていけば、それはある意味好循環が生まれるような気はしますけれども。

○浅田副校長

今のところ、地元志向に関しては、男女区別なくやっているのが現状です。

○井上校長

情報工学科の場合はどうでしょう。

○原副校長

昔は「男子をくれ」と言っている企業が割と多かったのですが、最近、特に県内でもそんなにこだわりがなくて、「男女関係なく」というような感じだと思います。ただ、女の子だから地元ということではなく、「地元に残りたい」という子は一定数いるのですけれども、仕事を見たときにどうかなということで、都会に流れていって、最終的に3割ぐらいという、希望はもう少しあるのではないかと思います。

最近では Ruby 関係で地元の求人が増えて、そういう関係で、ある程度そういうのが好きな子は割と地元に残る素地ができてきたというのが大きいかなと思います。

○秋重委員長

確かに女性の方というのは、学科が偏っていましたよね。

○原副校長

そうですね、今は情報というより環境・建設工学科が多くなったので。

○楫野委員

今、情報系はもう人手不足で。

○原副校長

そんなの構ってられない状況と。

○楫野委員

採れなくて困っているという状況なので、情報系に関しては、受けられたらすぐ入れますよ。しかも情報系は、「理系ばかりではなく、文系でも良い」と言っておられるわけですよ。かえって文系の方があります。「文系の方がコミュニケーション能力が高いから、かえって良い」という経営者の方もいらっしゃるぐらいで、要するに、お客さんときちんとコミュニケーションして、お客さんとどういうことをやりたいかということを引き出す能力がないと、それをプログラミングしていくという話なので、「コミュニケーション能力が高くないとだめだ」という方もいらっしゃるので、必ずしも理系で、「その専門性を高めたから良い」という話ではないと思います。

○原副校長

女子は、「先輩が行っているから」というようなつながりが結構ありまして、そういう意味でインターンシップは、「先輩が行ったから」という形で割とこちらも進めやすいですし、地元は「あの先輩も行っているから」ということで、こちらも進めやすかったり、女子学生の方も選びやすかったり、女子学生はそんなに冒険したがる傾向であるとは思いません。

○井上校長

環境・建設の女子学生の場合は、地元志向だと、例えばコンサルタント会社や公務員志望が多いことになりますか。

○浅田副校長

昔の建設会社は、女性は更衣室やトイレの問題が色々あって、なかなか採用しませんでした。コンサルタントと公務員しか道がなかったのですが、最近は仕事を取るのに女性の技術者がいるというのが条件になっていたり、あと、ドボジョという土木女子の色々なイメージアップキャンペーンがあって、建設会社の方から「女性を採用したい」という希望が強くなって。

○井上校長

島根の建設産業女子の会というものがあって、この前も4年生の女子学生に対して、本音で説明をする懇談会があったり、企業の採用についてもかつてよりも企業の女子学生の

獲得意欲が高いです。

○楫野委員

今、土木に関しては、島根県も採れなくて困っています。去年も追加募集してもまだ取れないという感じで、高卒を多少多く採ったみたいな傾向です。みんな東京というか、東北方面へ引っ張られてしまいました。世界経済、日本経済の状況によって左右されるものですから、こっちに枠があっても来ないということになっていまして、なかなか難しいです。

○糸原委員

同窓会ということで、仕事の関係で県の西部に行くと、誘致企業に時間があれば行くこととしているのですけれども、西部の会社が（一社）松江テクノフォーラムに入るといって、どうしても入りにくいというか、遠いということもあるので、私が携わっていたときも少なかったと思うのですけれども、「学生に来てもらいたい」という声は非常に高く、西部の企業の方に何かこういうことを聞いていただけるチャンスがあれば、西部の学生にとっては良い面もあるのかなと思っておりまして、その辺りの棲み分けが難しいですけれども、（一社）松江テクノフォーラムさんとの。

もう一つは、なかなか同窓会の部分では、まだまだお手伝いすることができていないのですが、きっかけとして、卒業生交流フェスタを設けていただいたので、少しでも続くようにしたいと思います。なかなか今年のように豪華にはいかないと思うのですけれども、その辺りのところを何とか続けるというか、せつかく東京方面でがんばっていただいているような卒業生がおられるということで、続けていけたらと思っています。

もう一つは、色々がんばっていただきたいのは、中学生はどんどん減っていくかもしれませんが、5 学科体制はなんとか維持していただきたい。たくさんの卒業生ががんばっていけたらと思います。5 学科体制をぜひ続けていただければ良いかなと。なかなか大変かなとは思っております。

○楫野委員

私は総務部長の時に私学担当をやっているときに、中学生の獲得合戦で、公立高校と私立高校との争いの中に、実は「高専の学校もっと減らせ」という声があるわけです。当時私

が言っていたのが、「そんなことは産業界が許さない」と言っていたのです。それは即戦力として期待されているのです。文科省も高専の存続の在り方を検討した時代があります。ところが産業界がものすごく大反対をして、今日の状況があるということなので、高専さんはこれだけの立派な学生を輩出されているわけですから。学力が落ちた子も一生懸命 5 年間で立派な社会人として送りだしているわけですから、自信を持ってこれからも指導していただきたいと思います。産業振興に関わるものとしてのお願いをしたいと思います。

○井上校長

なかなか難しいところがありまして、産業振興の観点の一方、特にこういう少子化地域におきましては難しい部分があると思います。期待していただいて大変ありがたいと思うと同時に、学校のレベルをどのように維持していくかということも考えていかなければいけないので、その辺りにつきましては、今後の教育、研究、あるいは社会貢献の内容を見極めながら、どのようにしていくか考えていきたいと思います。

それから、西部地域につきましては、先ほど紹介もありましたが、今年は浜田市長においでいただき、昨年度は益田市長に来ていただいてお話ししていただいたということもあります。また、西部の企業の方にご説明をいただき、その企業にインターンシップに行って、今回そこに就職する学生も出てきたという状況はあります。ただ、西部地域の出身者自体がそれ程いないということはありません。全体の中で 2 割いきませんし、自治体別で考えると、それぞれ数%以下という数になります。出身学生を集めて将来の希望について市長と懇談する機会を持ったのですが、「僕は一度外に出てみたい」という話が多かったです。受け皿ということを見ると、自治体のトップとしては、すぐに来てほしいとまでは言わないけれども、将来的に来てもらうか、あるいは起業することも考えてもらいたいというようなイメージでお話をされていました。

○楫野委員

私も石見人なので分かりますが、出雲は地元に残る傾向にあります。高校の卒業生は明らかで、7 割近くの高校は地元就職しますから。ところが今は大丈夫になりましたが、かつて石見は 2 割でしたから。外に出るのが当たり前でした。それは別に経済力などの問題ではなく、良い言い方をすると真摯の気性があるって、優秀な人間は外に出すという傾向にあります。親に経済力があるかどうかではなく、元からそういう傾向にあるので、気性が

そうなのです。

ですから、変な話ですけども、ある石見の方が起業されて、自分で大学を作られた方がいらっしゃるくらいに、経済界に色々な人が石見から出ているわけです。そういう傾向なので仕方がないことなのですが、一方で年代別で考えると、出雲の人と石見の人の 50 代で比べると、残っている率はほとんど一緒です。1 回出て、また帰ってくる人もかなりいます。

ですから、1 回出て良いから、将来的に地域に帰ってくる人材を増やすという、海士町でやっているのはそういうことです。海士町はブーメラン方式といって、力いっぱい投げれば投げるほど帰ってくるというのがブーメランといって、ブーメランのこういう形は、地元を愛する人間を作らないと、投げたまま出て行った形になるのですが、地域のことをきちんと知って、地域の思いがある人間をつくと、力いっぱい投げると将来的には立派な人間になって帰ってくるという、それでも良いと思っていました。

地元でずっと就職していただきたいのはやまやまですが、それだけではなかなか難しい。多様な人材が欲しいですから。ですから 1 回出て、成功して帰ってきてもらう。あるいは成長して帰ってきてもらう。あまりガチガチに考えずにやっていかなければいけないと思います。

引き続いて、楫野委員より参考資料である「平成 27 年度松江高専年度計画に係る自己点検・評価書」7 ページの一部についての誤記について指摘があった後、委員のみによる意見交換には入らず、さらに続けて意見交換した後、委員からの講評に入ることになった。

○秋重委員長

時間が来ましたので、それぞれの委員から意見を出してもらって終わりにしたいと思いますので、もう少し議論できるのであれば議論しておきたいと思っておりますけれども。

○楫野委員

先ほどの話にも出ましたが、定数の話については、文科省から何か言われているのですか。

○井上校長

「増やせ」とも「減らせ」とも言われてはいません。文部科学省においては、高等専門学校の今後についての協力者会議で、色々議論をしています。その中で全国的な観点からの配置の問題もあるわけですが、個別の定員数について、どう調整するかということをも具体的に検討している状況にはありません。

○大庭委員

効率化係数みたいな格好で毎年減らされているというのはこちらも同じなのですか。

○井上校長

はい。独法の国立高等専門学校機構の運営費交付金の予算の内容なのですが、やはり効率化係数は掛かってきます。その場合、国立大学法人と違うきつい掛かり方もありまして、一般的な管理費につきましては、マイナス1%ではなくマイナス3%掛かっております。

設置基準による教員数分につきましては、国立大学法人と同様に係数が掛からないということもありますけれども、高専は教員数の設定の仕方自体が厳しいと思っていますので、その辺りは様子が違うところです。いずれにしても効率化係数分は確実にカットされます。

今一番もっともきついのは、今度から定年になった教員について1年間不補充になるという措置がなされまして、松江高専では今年度末で定年になる教員が3名おりますけれども、その3名が欠員になった状態で、来年度は運営するという状況になっていることです。運営費交付金全体の減少によりまして、そのような措置も国立高専では内部的になされているというのが実情です。

○秋重委員長

すべての高専がそういうことになっているのですか。

○井上校長

そうです。それ以外に、いわゆる物件費の部分につきましては、各高専でかなりの金額が減らされていますので、その中でやっていかなければいけないというのが実情であります。

○楫野委員

お金の面からジワジワという話ですが、研究の外部資金を稼ぐことによって、ある程度補えるものですか。完全な事務費ではないですよ。それで事務費を補うというわけにはいかないですからね。

○井上校長

その中から、一定部分につきましては、共通的な間接経費がありますけれども、交付金の中での研究のための経費自体への影響が生じていますので、外部で勝ち抜きながら研究経費を獲得をしていくということが必要になってきます。

○秋重委員長

それは国立大学と同じですよ。運営費交付金が減ってきて、どこでそれをバックアップしていくかという、研究費をどんどん減らして、先生方に配る研究費がほとんどなくなってくる。その代わり科研費はある程度増えてきていますので、そちらの方に取りに行って、「研究したければ科研費でやってください」と、そういうことしか言えません。本来は「毎年これだけでやってください」ということがあれば、先生方も喜んでという心配なく研究できると思うのですが、なかなかそれができないものが 科研費、科研費といって、「当たればできるけれど、当たらなかった場合はどうするの」といつも言われますけれども。

○井上校長

厳しいのは、高等専門学校は大学と違う側面が相当ありまして、それは教育の要素というものが非常に高いところでありまして、その中で教員が教育に割かなければいけない要素が非常に大きい状況で、一方では研究もしなければいけないような形でありまして、その中でも何とか研究費の確保をということで、先ほども説明申し上げましたが、かなりがんばっているほうではないかと思えます。ただ、外部資金につきましては波がありますので、ある年度と次の年度で相当な開きが生じるということもあります。それを経常的に確保できるわけではないという側面がありますから、かなり苦勞しながらやっているというところですよ。

○秋重委員長

それではまとめのほうに入ります。私のほうから少しだけお話をさせていただきます、足りないところは皆さん方にお話をさせていただければと思います。

概要のところではいろいろ、地（知）の拠点の話、島根大学とやっている事などのいろいろな話、それと交流フェスタの話、非常に良い取り組みだと思っております。ぜひともこれを続けていって、U ターンを確保するとか、COC プラスで地域に学生さんたちを根付かせていくという活動をやっていただきたいと思っております。

それから、いろいろな活動の紹介がございましたが、全体的にもものすごく良いことをやられているなという印象でございます。5 年生が下級生を教えて、それでどんどん伸ばして、数学や物理なども他の高専と比べても遜色がないぐらいの成績を収めているというのも非常に素晴らしいことだと思っております。

特にクラブ活動の成績が素晴らしいと思ったのですが、これについては特別なこと、先生方が熱心に指導されているのかもしれませんが、ロボコンとかそういうところでは、我々一般市民生活の中でも高専の学生たちのロボコンで良い成績を収めたというのはみんな知っているようなことですので、ぜひともそういう活動を続けてがんばっていただきたいということです。ほかにもクラブ活動で優れた取り組みをされています。

最後のところで、就職をどうするのかということがここでも随分議論になっていました。今、30%まで学生さんたちを地域に根付かせておられますが、ここに来られる学生さんというのは、ほとんどが島根県出身者の方で、「残りの 70%の方はよそに出て行っている」という話になっています。それは非常にもったいない話なので、これだけ優れた教育をされて育ってきた学生さんたちを地元になるべく根付くようなことをお願いしたいなと思っております。そのためには、地元を知ってもらうという活動が非常に重要で、インターンシップで地元企業に行ってもらったり、島根の地がどれだけ素晴らしい土地なのかということとか、環境の素晴らしさを学生たちに教えていくという活動をきちんとやってくださいということだと思います。

女子がどんどん増えてきているようですので、女子が島根の中で活躍できるようなことを教育してやっていただきたいということではなかったかと思っております。

以上が議論の中で出てきた私としての総括的な話です。足りない部分はそれぞれ出させていただければと思います。

○楫野委員

私も産業振興部門に携わっていますが、ソフトビジネスパークができた平成 13 年度、私が産業振興課の課長補佐をしているときに、当時の校長先生でありました宮本校長先生と出会いまして、確か（一社）松江テクノフォーラムでお会いしたと思いますが、そのときに企業化支援の補助金の審査委員に就任をしていただいたと記憶しておりますが、そのとき以来高専さんとは非常に良い関係を築かせていただいて、ここにおられます糸原さんも産学官連携の番頭として、ここの先生方と一生懸命企業団との仲立ちをしてくれたと思いますが、そういう意味では、高専さんが島根県の産業界に果たしている役割というのは非常に大きいものがありますので、引き続きこういうスタンスを保ちつつ努力していただきたいなと思っています。

その中で、私ども財団で協力できることが何かあると思います。特に先ほど申し上げましたように、企業さんに私どもは常に接触しておりますので、その中で就職に関する情報、人材に関する情報があって、それが高専さんに関するものであれば、的確に情報共有しながら向かっていきたいと思っていますので、今後ともよろしくお願いいたします。

○大庭委員

秋重先生がまとめていただいたので、特に付け加えることもないのですが、強いて言いますと、地域のアントレプレナーシップ教育をやっておられるということで、地域を知るということを通して、地域にどう生かしていくかということ、イベントに参加するということで、どんどん自分から出て行かないといけないというのは良いことだと思います。

できたらそれが紙の上ではなくて、本当に次の起業というところに繋がって行って、島根県の若い力みたいなものが出ていくようなことになっていくと良いなと感じます。

○糸原委員

私のほうも付け加えることはありませんが、引き続き同窓会の関係で、一緒にさせていただければと思っています。ソーシャルネットワークの部分と、それから学生の支援のところ、先生方が学生の教育に対して、私もかなり古い頃から知っているのですが、今の先生方は凄いなと思っています、本当に学生を大事にしておられるということが良く分かりますので、今後とも大変かと思いますが、教育と研究によって地域貢献にがんばっていただければと思います。

○秋重委員長

それでは、以上で議事を終了しますのでお返しします。どうもありがとうございました。

閉 会

閉会にあたり、井上校長から挨拶があった。

○井上校長

今日は長い時間にわたり説明をお聞きいただき、また、意見交換とともに熱心にご議論いただきましてありがとうございました。

今日は色々な形でご意見をいただきまして、さらに私どもにとりましては心強いお話もいただきまして、大変ありがたいことだと思っております。

これからも高専といたしまして、地域における存在感をきちんと保っていきたいと考えておりますので、引き続きどうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。今日はどうもありがとうございました。

平成 27 年度松江工業高等専門学校外部評価委員会を終了